

# 慈濟

ものがたり

仏陀の故郷への恩返し  
高山の石地に新しい教室ができた





● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黄筱哲

## 真善の美しさ

生命の価値は自ら振り返り、  
感謝の心で諸々の善を施し、  
皆で情を繋いで福を造り、大愛を広めましょう。  
弘法で衆生を利用して力を結集し、  
助け合って苦難を取り除けば、  
和気藹々とした助け合いの真善美で、  
光明が遍くこの世を照らすでしょう。





慈済ボランティアは、仏陀の故郷に長期滞在して、現地の住民たちが自助と助け合いをするよう導いている。2023年11月にネパール西部で強い地震が発生した時は、山間部の小学校でプレハブ教室の建設を支援したり、ルンビニで職業訓練を受けている女性たちが編んだ毛糸の帽子を送ったりして、生徒たちが安心して授業を受けられるようにした。



慈済日本サイト

# 目次

【編集者の言葉】

大愛は無形だが温さがある

善耕／訳 4

【今月の特集】

路地から路地へ街を歩いて愛を繋げる

御山凜／訳 8

インド・ブッダガヤのもう一つの風景

心嫻／訳 10

ブッダガヤの一日

御山凜／訳 18

就学人生で初めての学生カバン

江愛實／訳 30

一枚の帽子を編むことは一つの夢を紡ぐこと

江愛實／訳 32

歳末祝福 さらなる変化

何慧純／訳 36

高山の石地に誕生した教室

心嫻／訳 40

仏陀成道の地に行く 書き尽くせない苦楽

施燕芬／訳 45

【證嚴法師のお諭し】

自分が菩薩になれることに期待する

慈願／訳 58

【仏教慈済慈善事業基金会執行長新年のご挨拶】

善い願を共に実行するお力添えに感謝する

施燕芬／訳 64

【台湾慈善】

呼吸ができる家

惟明／訳 70

【親と子と教師、三者の本音】

思いやりも練習が必要

江愛實／訳 76

【命の贈り物】

まだ抱きしめることができる両手がある

江愛實／訳 82

【聞・思・修】

「二本指タイピング」から始まったマジック

明滙／訳 88

読書によって慈済の種子を届けたい

江愛實／訳 94

【行脚の軌跡】

実践したことを話す

済運／訳 100

三月の出来事

済運／訳 106

## 大愛は無形だが温さがある

霜や雪が静かに石川県能登半島の穴水町を覆い、古い民家が並ぶ路地は白くなった。今はリンゴ、キャベツ、大根の最盛期で、北国の冬景色は旅人の憧れである。しかし、元日にマグニチュード七・六の地震が発生した後、各地から医療従事者や災害救助隊員が駆けつけ、一部の人員は公立穴水総合病院に集まり、慈済ボランティアも注目した。昼食の炊き出しは一月十三日からの実施だったが、多くの人が列を作り、自主的にかわりと言えるようになり、記念撮影に納まるうとしたことから、台湾の味を取り入れた日本料理が人々の心を捉えたのだと分かる。

しかし、カメラを他の方向に向けると、断水している被災地で慣れな

い厨房と調理器具を使って、一日に数百人分の昼食を作らなければならぬ様子や、東京や大阪などから来た慈済ボランティアが映った。気温は氷点下でも冷や汗をかくことが多く、忙しさのあまり午後三時過ぎになつてからやっと、インスタントラーメンでお腹を膨らますこともあった。

日本では、政府による救災は非常に系統立っており、動員も組織的である。例えば、昼食を受け取りに来る人が着用するベストには、どこから派遣されて、何が専門なのか一目で分かるようになっていて、慈済人のことも、被災地でのような役割を果たしているのかを人々に見てもらふことが交流の第一歩だった。恐らくこのような小さなところから理解が始まるのだろう。一月十七日の昼食は味噌味の中華丼だったが、ボランティアはお腹も心も温まる熱い汁物がもう一品あった方がいいと

考え、待機していた師兄が直ちに車で水を探しに出かけた。愛は無形だが、一食の温かい食事から愛の温度を感じることができるとの事だ。

中国語繁体字版の月刊誌『慈濟』は、二期にわたって、能登半島地震における慈濟の支援活動を続けて報道している。また、今月号は特別に仏陀の故郷を訪れ、年末年始にボランティアが多忙な日々を送ったことも紹介している。この時期、世界中の慈濟人はそれぞれの国で歳末祝福会を行っているが、中でも特別なのは、仏陀生誕の地であるルンビニと、仏陀が悟りを開いたブツダガヤで行われた祝福会である。前者はネパール南部に、後者はインド北部にあり、どちらも仏教の聖地として知られており、特にブツダガヤでの歳末祝福会は、今年初めて行われたことだ。この二年間、シンガポールとマレーシア、そして台湾のボランティア

がリレー式に投入して、基礎教育や女性の地位向上への自覚に力を入れてきた。カースト制度に慣れている当地の人にとって、紺のシャツに白のパンツ姿の外国人がやって来て駐在し、誰にでも平等に生活技能訓練と医療を提供し、貧しい人や病人など立場の弱い人々を救済し、良い価値観を奨励するといった試みは、理解し難いことであったが、ボランティアの誠意に心を打たれたのである。農作業のために学校を中退した子どもたちは、一人また一人と制服姿でカバンを背負って学校に戻ってきた。女性たちも、一人ひとり勇敢に家から出て、裁縫や編み物を学んだので、収入が得られるようになった。彼女たちの笑顔が、愛は無形だが、その影響力は目に見えるものだと、と改めて感じさせてくれた。

（慈濟月刊六八七期より）



# 路地から路地へ 街を歩いて愛を繋げる

二年前から、シンガポールとマレーシアのボランティアは、ネパールのルンビニに滞在し、ブツダ生誕の地で慈善活動を始めた。今年初め、ブツダが成道した場所であるインド・ブツダガヤで歳末祝福会を三回行い、二千三百人余りに仏法に親しんでもらった。慈済は五十八年目に入り、ブツダの故郷を無から有に変え、現地ボランティアが担ってくれたことで、一同は大愛を路地裏にまで送り込むことができた。



インド・ブツダガヤのボランティアが脳梗塞を患ったサムフルさん（中央）を訪ねた。現地ボランティアのスダさん（右）はシンガポールとマレーシアのボランティアに同行してケア世帯とどのように接したらよいかを学んだ。（撮影・林家如）





## インド・ブツダガヤのもう一つの風景

文・魏玉縣（台中慈濟ボランティア） 訳・心燦

インドのブツダガヤは、二千五百年余りに仏陀が成道した場所である。今は仏教四大聖地の一つとなり、世界各地から旅行者が訪れている。この半年間、シンガポールとマレーシアの慈濟ボランティアは、巡礼や修行にも来るが、更に、そこで人々が心の安らぎを得られるように、「平和で幸福な場所」を創りたいと志を立てた。

ブツダガヤのラッティビガ村は住宅が密集している。2023年9月に医療チームのボランティアが何度も村を訪れて、村民に健康診断を行った。  
（撮影・鄧亦絢）

# 早

朝、インド・ブツダガヤ慈済連絡所の外に二台のトゥクトゥクが停まっていた。車の屋根には黒板や扇風機、サッカーボール、食器、ノートがいっぱい積まれ、中には十人の慈済ボランティアが乗っており、ここから四、五十分の距離にある二つの学校に出発するところだった。その横には、地元ボランティアのアマルさんがバイクで付き添った。後ろの席にはマレーシアから来た、副校長を退職した姚雅美さんが乗っていた。

インドの田舎では全般的に清潔な水に敷いた水道管から学校の貯水槽までパイプを繋ぎ、そこから調理場、洗面台、トイレにパイプラインを敷設した。

水のある日は長く続かなかった。というのも、農民が水道管の途中から水を灌漑用に引いてしまったのだ。学校側は、なす術がなかった。毎週学校で静思語を教える姚さんは、校長先生に「何がなんでも政府に水不足の問題を解決してもらってください」と懇願した。

一年生の教室に来ると、四十五人の子供が裸電球一つと二つの窓だけを頼りに明かりをとっていた。全員が布

が不足している。今年五月、慈済ボランティアがブツダガヤの多くの学校を訪れて水質調査を行ったところ、ガート公立学校は、水だけでなく、各種学用品も不足していたので、今回九月二十日に配付活動が行われた。

学校は、トゥクトゥクの運転手でさえ途中で道を聞かなければならないほど辺鄙な村にあった。そこは二十年もの間水道が通っておらず、近くに住んでいる女性教師が毎日バケツ二杯の水を学校まで運び、子供たちに手を洗わせていた。ボランティアは、政府が近く

を敷いた床に座り、ある子供の側には更に小さい子が寄り添っていた。彼らの弟や妹だろうと容易に推測できる。

インドの高温は有名だが、各教室にはシーリングファンが一台しかない。また、食事の皿も足りないのです、子供たちは交代で食事をしなければなりません。子供が放課後に一番したいのはサッカーだが、サッカーボールは全て破れてしまっていた……ボランティアは何とかしてその状況を改善した。校長のシブ・プジャンさんは、「慈済にとっても感謝しています。我が校が今直面している問

仏陀の故郷への恩返し

## ブッダガヤでの慈濟基金会



シンガポールとマレーシアのボランティアが常駐して付き添っている。

ネパール・ルンビニ（仏陀生誕の地）  
インド・ブッダガヤ（成道の地）  
インド・ラジギール（弘法の地）

### ブッダガヤ・ケアプロジェクト

2023年3月11日から展開。2023年9月13日連絡所を設置。

地域：ガンジス河沿ビハール村、スジャータ村、  
シロンガ村、タポヴァーナ村

慈善：ケア世帯支援、職業訓練（裁縫教室）、  
手当支給（被災者を一時的に雇用する自立支援策）

医療：健康診断、医療補助

教育：学校での静思語教育、木の下で補習クラス、  
教師懇親会の設立、中退ゼロプログラムの推進

題は全て解決してくれました」と笑顔で言った。

政府は子供たちの制服代を各家庭の銀行口座に振り込むようにしているが、やりくりができず、銀行に口座を開くことが難しい親もいる。それ故、子供たちは私服で登校しており、校長先生は、何か方法を考えてみると言った。様子を見るしかなく、姚さんはため息をついて、「良い結果が出ることを願っています」と言った。

ボランティアたちは再びゴンガリヤ学校を訪れたが、サルミラ・クマリ校長が最も困っていたのが、子供たちの

欠席が深刻化していることだった。学校生徒百八十人中、毎日登校しているのは百二十人ほどしかない。というのも、学校には教室が二つしかなく、また、親が農作業や家事の手伝いのために、子供を家に引き留めているからだ。姚さんは、教師が学校に行かなくても良い休日を利用して、皆と一緒に欠席している子供たちを訪ねるつもりだ、と言った。

校長先生は難色を示したが、姚さんは「その気さえあれば、できますよ」と励ました。姚さんは、台湾とマレーシアのボランティアのことを例に挙げた。



彼らが遠路はるばるインドに來たのは、子供たちの教育水準の向上を手助けするためなのである。

姚さんは、実は、既に心に決めていたと言った。たとえ先生たちが参加しただがらず、一人や二人しか同行しなくても、彼女は実行に移すつもりだった。「上人が『中退ゼロ』、『欠席ゼロ』の達成を望んでいらつしやるからです」。

家庭を一周すると、ブツダガヤの教育、公衆衛生、厳しい生活などの現実を知ることが出来る。慈済基金会は二〇二二年十一月、インドでNPOとして登録し、二〇二三年九月十三日にブツダガヤ

を開いたのである。後に、サルナートで法を弘め、クシナーラーで入滅した。即ちネパールとインドの双方とも仏陀の故郷なのである。

ここ数年はコロナ禍の影響が大きく、昨年四月にネパールの国境が開かれるまで出向くことができなかったが、その後直ちに仏陀生誕の地であるネパールのルンビニに向かった。一年間の経験から、特に、静思語教育に対する反響がとても良いことを知り、ボランティアチームは、それをインドのブツダガヤ・シロンガ村にも広めた。そして、スジャータ村でブツダガヤ初めての慈善

に慈済連絡所を開設した。貧しい住民に助けを求められる場所を提供し、地元ボランティアを養成することが、これからの努力目標である。

仏陀は弟子たちに悟りへの道を教えしたが、證嚴法師は仏陀の故郷に恩返ししたいと常々願って來た。歴史を振り返ると、シツダールタ王子は修行のために宮殿を出て、苦行林で六年間苦行をしたが、そこを離れようとした時、体力が尽きそうになり、羊飼いのスジャータにヤギの乳を提供してもらったことで体力が回復し、尼連禪河を渡ることができた。そして、菩提樹の下で悟り

ケア世帯案件が成立した。その後、住民の医療ニーズに応じて、六月からコミュニティで健康診断を行った。

現地に連絡所を設置してからというもの、シンガポールとマレーシアのボランティアは、もうホテルに泊まらなくてもよくなった。そこは世界の慈済人の家であるだけでなく、世界中の人が巡礼や禅の修行のためにブツダガヤを訪れた時、慈済連絡所がそこにあることで、あらゆる人にとっての「平和と幸福の場所」となり、心の安らぎを得る場所でもあることを知ってもらいたい。

(慈済月刊六八四期より)



# ブツダガヤの一日

文・丁碧揮（台北慈濟ボランティア） 訳・御山凜

トゥクトゥク（三輪タクシー）は尼連禪河の河畔の村で停まり、ボランティアは牛を避けながら村に入った。ブツダガヤでの日々は、千里の道の第一歩でもある。

## 朝

の六時、太陽が東から昇り始めた頃、ブツダ成道の聖地を示す大菩提寺から徒歩で二十分の距離にあり、畑の側に建てられた慈濟ブツダガヤ連絡所は、徐々に朝日に照らされ始めた。七時を回る頃、連絡所や付近のホテルに宿泊まりしているボランティアが一人ひとりと連絡所の一階に集まり、現地の人も

様々な方向からやってきた。「グッドモーニング！」という共通言語で挨拶し、一日のスケジュールが始まる。

朝の打ち合わせで、皆は当日のスケジュールと重要任務の分担を確認する。現地ボランティアはヒンディー語を話し、シンガポールとマレーシア、台湾のボランティアは中国語を話す、この時

は皆英語を話す。そうしていると、連絡所の入り口にシロンガ村から女性たちを乗せたトゥクトゥクが到着した。職業訓練の裁縫教室が、八時から始まるからだ。少し遅れて、第二組のメンバーがスジャータ村からやって来た。どちらのクラスも、ピンキー先生が裁縫を担当し、ボランティアの欽図（チントウ）さんが、慈濟手語を教えている。

それが終わると、二十人ほどのボランティアがチームに分かれてトゥクトゥク

●スジャータ村で長期間、訪問ケアを続けるボランティアに、村の女性たちが親しげに挨拶した。

（撮影・葉晋宏）



に乗り、ブツダガヤ周辺の貧しい村や学校に向かう。冬に入ると寒暖差が大きくなり、早朝は摂氏七〜八度だが、昼間は急に摂氏二十度以上になる。ボランティアは馴染めるよう努力しながら、人助けをして、貧しい村の先生や生徒に温もりをもたらしている。

### 善念と善行は温める必要がある

インドでは数千年前からカースト制度が依然として続いており、住民の生活に多大な影響を及ぼしている。今日では、人口が十四億を超え、最下層の貧しい

人々は二・三億人に達した。国連の統計によると、インドは世界で最も貧困者が多い国である。

二〇二三年三月から、マレーシアとシンガポールの慈善ボランティアは、数回に分かれてブツダガヤに滞在し、ブツダ生誕の地であるネパール・ルンビニで培った経験をブツダガヤに拡大しながら慈善、医療、教育、人文等の志業を展開してきた。

例えば慈善チームは、訪問ケアと貧困救済以外に、連絡所で裁縫教室や英語教室、パソコン教室などの職業訓練コースを開設し、住民が手に職をつけられるよ

うアシストしている。年末年始、ブツダガヤで奉仕していた医療チーム章愛玉（ジャン・アイユー）看護師と現地ボランティアのインドラジートさんは、ケア世帯の通院の付き添いや在宅でのガーゼ交換、訪問ケアを含む支援を通じて住民の健康を見守り、断酒のサポート等を行ってきた。

教育チームは、現地ボランティアと協力して十カ所の学校をケアしている。毎日学校に行つて静思語をシェアすると共に、各学校で親子運動会を開催し、先生と親と子の間の絆が深まるよう支援している。人文真善美（記録）チームは、台

湾からのボランティアが交代で担当している。現地ボランティアのアマルさんと協力して、写真や文章、映像でブツダガヤの現況とボランティアの軌跡及び美善のストーリー等を記録している。

現地ボランティアは、各チームの中で必要不可欠な役割を担っている。元々彼らは現地コミュニティの一員であり、海外ボランティアに周りの環境と住民の生活状況に関する情報を提供してくれるので、慈済の模索期間が短くてすむ。慈済が志業を推進する良きサポーターである。

海外ボランティアは、現地で長期滞在するにしろ、引き継いで任務を担うにし



ろ、全て「弘法利生」という使命の下に、證嚴法師の理念を伝承し、「ボランティアの現地化」という目標を進めている。慈善救済と医療ケアは長期的な任務であるため、外国人の入国日数の制限やボ

●慈濟フッタガヤ連絡所の外では、トゥクトゥク三輪車が発の準備をしていた。現地ボランティアの道案内で、慈濟ボランティアと物資を乗せ、村内を訪問ケアに向かう。(撮影・林家如)

ランティア各人の家業や事業の制約がある中で、如何にして支援を続け、「九仞の功を一簣に虧く」ことにならないようにするか？二十歳の女性タタリさんの話はとても良い例である。

二〇二三年五月、ボランティアはラッティビガ村で彼女を発見した。幼少の頃から足の病気で足首から下が切断されていたが、症状は未だに改善されてない上に、家が貧しいために治療を続けることができず、腫れ上がった部分の痛みに長年苛まれてきた。ボランティアは彼女に治療を続けさせ、切断手術費用から義足をつけるまで、全額を負担すると約束した。

彼女が手術後に帰宅したが、当地の医療は遅れており、加えてタタリさんの居住環境が悪かったこともあり、傷口の回復は順調ではなかった。医療チームは、毎日彼女のために自宅に通ってガーゼ交換をすることにした。林金燕（リン・ジンイェン）さんは、数カ月間彼女に付き添ったが、途中で用事のためにシンガポールに一時帰国しなければならなかった。章さんの協力を仰ぐことにし、十一月二十日特別にシンガポールから来てもらって、ケアを引き継いだ。このガーゼ交換は、一カ月余り続いた。章



さんの荷物は三十キロほどあったが、大部分はテタリさんのために準備した医療用消毒ガーゼや薬用シート、消毒薬及び外科器具等だった。

傷口の膿は初期の淡い青色から徐々に淡い黄色に変わり、傷口の腐肉を除去した後は、日毎に癒合が進んでいった。章さんは十二月二十九日にシンガポールへ帰国する時、午前中に再度取り換えたが、引き継いだ時は血肉が混ざって拳のように大きかった傷口が、その時は小さいガーゼで覆うことができるほどになっていた。彼女は、テタリさんがこれ以上苦しむことがなくなったことを、とても嬉

しく感じた。

章さんは時間と自分の専門を投入したばかりでなく、病に苦しむ人を見るに忍びない心を持っている人だとテタリさんと彼女の両親も深く感じ取った。離れる前に取り換えた時、いつもはドアの外で離れて見ている謹厳実直な父親まで、進んで記念撮影に加わった。

### 慈濟ボランティアに憧れて

目下の慈善救済と医療ケアの重点地区は、シロンガ村、スジャータ村、ガンガビガ村、タボヴァーナ村、ゴーガリア村、

ハティヤール及びブツダガヤ等である。

前正覚山（ぜんししょうがくざん）は、大菩提寺から東北へ行くこと約七キロの所に位置し、山中の石窟はブツダが六年間、苦行をした場所で、今日では重要な観光スポットになっている。前正覚山の麓の村落がタポヴァーナ村で、多くの村民が聖地の巡礼に来る観光客から物乞いをして生計を立てている。

二〇二三年十一月十四日、章さんとインドラジートさんから一行五人は、村民の栄養失調を補うために、たんぱく質を豊富に含んだ豆の配付を行った。ボランティアが乗ったトゥクトゥクが村の入り

口に止まると、子供たちが続々と押し寄せ、簡単な英語を使い、物おじすることなく、手を伸ばして金銭をねだった。ボランティアは幾度となくタポヴァーナ村に入って、ケア世帯に訪問ケアや健康診断、配付等を行っており、そのような光景はすでに日常茶飯事である。

章さんによると、配付対象の大半は家庭内で世話をしている人で、往々にして世話している人が栄養失調なので、対象者も栄養失調になっていることを表している。その日は七世帯で配付と体重測定をし、二時間半を費やした。ボランティアを乗せてトゥクトゥクを運転していた



## 栄養補給食品配付プロジェクト

・慈済人医会のボランティアが、村内で健康診断を行う。ボディマス指数（BMI）が低過ぎて栄養失調になっている村民がいると、豆を配付し、仕入先から新鮮な搾りたての牛乳を提供するようにした。ボランティアは毎月、再調査と体重測定を行っている。

・ボランティアは、ヒヨコ豆、木豆、赤レンズ豆、緑豆、黄エンドウ豆等の配付と同時に計量カップも提供することで、村人が毎日十分な量を食べてもらえるようにした。通常は四〜六カ月で効果が現れ、健康が促進され、疾病を防げるようになる。



運転手のスレンドラさんは、ボランティ  
アのインドラジートさんの長兄で、理  
的でない村民が物資をもらっていないと  
文句を言ってボランティアを怒鳴りつけ  
ても、ボランティアたちはただ笑顔でお  
辞儀して通り過ぎたので、お兄さんは怒  
りがこみ上げ、相手に対して言い返せず  
にはいらなかった。

インドラジートさんはそれを見て、自  
分のボランティアベストを脱ぎ、お兄  
さんに着せ、そしてお兄さんに、その後  
の豆の配付活動への参加をお願いした。  
ボランティアは、なぜそのようなことを  
するのか？と尋ねると、お兄さんに変

うに現れた。チームがガンガビガ村に着  
くと、ふいに一人の村人が新鮮なグアバ  
を抱えて現れ、ボランティアを労った。  
インドラジートさんはその人を覚えてい  
た。彼はテタリさんの父親、シュカール  
さんその人だった。

いつも日暮れる頃にボランティアたち  
は各地から連絡所に戻り、その途中で、  
よく尼連禪河に架かっている橋を通る。  
二千五百年余り前、苦行を止め、尼連禪  
河で身を清め、スジャータから羊の乳粥  
の供養を受けてから、徐々に川を渡る力  
が戻り、最終的に菩提樹の下で悟りを開  
いた。

わってほしいのだと答えた。自分も慈濟  
人であることを感じてもらい、心を落ち  
着かせて、理性的ではないことに遭遇し  
た時も、対処できるようになってほしい  
のだった。

お兄さんは弟の誠意を感じた。そして、  
「弟は慈濟ボランティアと一緒に活動を  
終えた後、小声で優しく話すようになり、  
気性も良くなりました」と言った。彼は  
弟のことを嬉しく思うと共に、慈濟ボ  
ランティアの果たす役割に憧れる気持ち  
が芽生えた。

善の効果は、見返りを求めない奉仕の  
足跡の中で、一輪一輪と蓮の花が咲くよ

ブツダガヤは仏教八大聖地の中でも重  
要な意味を有しているが、今でもインド  
で最も貧しい地域の一つである。当時  
ブツダが悟りを開いた場所は、世界に名  
を馳せた大菩提寺として知られ、天気が  
良ければ、川を渡る時に夕日と大菩提寺  
が出会う美しい景色を堪能することがで  
きる。束の間の興奮の中、正信の仏教が  
ここで興盛し、長く続いてほしいとそっ  
と心の中で祈った。

暮色が平野を覆った。冬の夜は長いが、  
心の奥に灯った灯りが一つ一つ伝わり、  
ブツダの故郷へと広がって行くようだっ  
た。(慈濟月刊六八七期より)



# 就学人生で初めての学生カバン

インド・ブツダカヤの慈濟ボランティアチームは、二〇二三年十二月十一日午後、南部ファテールプルのスルタンプール中学校で、三百六十一個の学生カバンを配付した（左の写真）。

この半年間、ボランティアはへき地や貧しい地域の学校を捜し出し、一カ所ずつ訪れた。多くの生徒は裸足で登校

していて、制服はおろか、学生カバンを持ったことさえなく、米袋や布袋で代用していた。文房具は彼らにとって、贅沢品なのだ。

十一月二十三日から十二月十五日まで、十四の学校で四千個余りの学生カバンを配付した。（資料の提供・楊春燕、魏玉縣）（慈濟月刊六八七期より）



## 教育ケア

- ・ 中退者ゼロ計画、学校の建設支援、大学生への奨学金と授業料補助、静思語教育、コミュニティでの補習クラス。
- ・ 配付項目：学用品、防寒服、サンダル。
- ・ 運動会を催して、保護者が子供の就学状況に関心を持ち、教師と生徒の間の感情を近づけるのが目的。





資料提供・呉南凱（シンガポール慈濟ボランティア） 撮影・ラージ・クマル（ネパール慈濟ボランティア）  
訳・江愛寶

## 一枚の帽子を編むことは 一つの夢を紡ぐこと

「最近、私は帽子を五枚編んで、千五百ルピーの工賃をもらったので、滞納していた学費をすぐに支払いました」。ネパール・ルンビニ第四里メ

ノーラ村のサンギータさんは、慈濟の職業訓練講座に参加して、毛系の帽子を編むようになった。彼女は地主から田んぼを借りて耕作しているが、ご主人は臨時



雇いなので収入が不安定である。一家八人が最も困難な時は、ご飯に塩を掛けて食べるしかなかった。しかし、子供には同じような人生を送らせたくないと思いい、彼女は子供に教育を受けさせることを堅持した。「私にこのような機会を与えて下さって感謝しています。自分の手でお金を稼ぐことができるのですから」。

慈濟は村の女性たち呼びかけて、毛系の帽子を編んでもらっている。慈濟が毛系と教師を提供し、検品に合格した完成品には、一枚三百ルピー（約三百四十円）の工賃を支払っている。これは首都カトマンズでの三十ルピーより

もかなり高額だ。彼女たちに収入ができただけでなく、ケア世帯や支援建設している学校の生徒及び西部地震の被災者世帯に、防寒用として送ることもできた。第四里コンペ村とメノラ村以外に、慈濟連絡所でも、女性たちが毎日、毛系の帽子を編んでいる。二〇二三年十月から今年一月初めまでに、既に千枚余りの帽子が編み上がり、配付物資として提供されている。

このようなアイデアが生まれてから、女性たちは編み針と糸を手放したことが無い。村に入ると、至る所で集まっては座って編む人、しゃがんで編む人、立つ

たままに編む人もいて、皆が没頭していた。工賃を受け取る時は、名前が呼ばれると、サインか拇印を押しに行く。そして、ニコニコしながらお札を数えていた。時にはその中から小額の紙幣を取り出して、人助けのためにと竹筒貯金箱に入れる人もいた。

ウルミラさんは、ガソリンと肥料を買

うために、工賃をご主人に渡した。ガソリンは地下水を汲み上げる灌漑用のポンプに使い、肥料は麦の苗の成長を助けるのに使う。「私たちはやつと、以前のように、自分はとにかく貧しいのだからと絶えず人に施しを求めるようなことは、しなくてもよくなりました」。

（慈濟月刊六八七期より）

## 職業訓練

- ・コミュニティに裁縫教室を開設・エコバッグと制服の製作。
- ・職業訓練コースの開設・縫製教室、編み物教室、手作り石鹸教室。
- ・「仕事を与えて支援に代える」活動・民衆を雇って、住宅建設支援に協力してもらうと同時に、建築に関するスキルを学んでもらう。

## 歳末祝福 さらなる変化

一月七日にマハーボーデイ・コンベンションセンターの外には、珍しく住民の行列ができていた。ブツダガヤで慈済が開催する初めての歳末祝福会に参加しようという老人や子供を伴った人たちの列だった。祝福会では、「慈済大蔵経」及びボランティアと地元の青年による慈済手語劇「行願」を見て、手話に合わせた「千手世界」の曲を聞くことができた。

訪れた人は二千三百人を超えた。最後にボランティアから福慧のお年玉とこの日の縁の記念品をもらい、円満に会は終了した。（左の写真）

五十人の連絡所の職業訓練クラスに参加している人と地元の学校の上級生の女生徒たちが、青と白のインドの伝統衣装を身につけて登場し、しなやかな美しい動作で「千手世界」の「一手が動けば千手



が動く」動作を表現した（次のページの写真）。慈済職業訓練英語クラスのルーシーさんは、感想をこう語った。

「私は今まで一度もステージに立ったことがありませんが、今日は、舞台の下で皆が拍手してくれるのを見て、とても感激しました。今日は人生の中で一番大切な日になりました」。

代々、社会の底辺で貧困な生活を余儀なくされてきた女性たちは、往々にして教育を受けるチャンスがなかった。結婚後、





荒々しい振舞に遭ったという話もよく耳にする。環境が彼女たちを強くし、先進的な性格にしたと言える。練習が始まって一カ月が経った頃、慈濟手語と歌や曲が裁縫職業訓練クラスの雰囲気と和らげていった。裁縫を教える萍姫（ピンジー）さんによると、彼女たちは歌詞の意味を完全に理解しているわけではないけれど、「千手」が伝えたいのは、一人の力には限りがあり、もし皆の力が集まれば、

無数の人を助けることができるということとは分かっているそうだ。地元ボランティアの欽図（チントウ）さんは、男性演技者として「行願」に参加しただけでなく、「千手世界」を演じる女性演技者の指導にもあたった。彼は歌詞の意義を理解し、さらに一字一字習得してメロディーを覚え、十二月の初めからチームを率いて稽古を始め、最終的に完璧な舞台に仕上げた。



資料提供・呉南凱（シンガポール慈済ボランティア）  
撮影・洪徳謙（シンガポール慈済ボランティア）  
訳・心嬖

# 高山の石地に誕生した教室

## ネ

パール西部の山岳地帯にあるシュリー・ジャナ・ユワ小学校では校舎脇の空き地で十人ほどが、フレームを組み立てて板を設置するのに忙しくしていた。季節は冬を迎え、風雪が迫る中、子どもたちの教室の建設を急いだ。

二〇二三年十一月三日、ネパール西部のカルナリ州ジャラルコット県で、マグニチュード五・六の地震が発生し、百五十七人が死亡した。それは二〇一五年以来、

最も多くの死傷者が出た地震だった。家屋や学校も大きな被害を受け、三百キロメートル以上離れたルンビニの慈済ボランティアが、被害調査に駆けつけた。

その高原の地形は平野にあるルンビニとは大きく異なり、至る所が石だらけである。村人はそれらの石を使って家を建







てており、ルンビニの田舎によくある茅葺きや土壁の家はここでは見られない。野外での授業を強いられる教師や生徒のことを思い、ボランティアは応急的に仮設教室を建設することを決めた。

## 災害支援

- ・一九九三年にネパールで大洪水が発生し、慈済は支援に赴いた。そして、一九九五年に三つの県で四つの大愛村の建設を支援した。
- ・二〇一五年の大地震の後、慈済ボランティアは国境を越えて災害支援を行った。バクタプル市などの被災地で物資を配付し、施療や食事の提供を行い、延べ二十一人余りを支援した。
- ・二〇二三年十一月に西部で発生した大地震では、慈済は五つの学校で三十のプレハブ教室の建設を支援し、その後も被災世帯が自力で家を建てられるよう、建材を提供した。

学校側が元の場所に恒久校舎を建設する時のために、容易に解体や移設できるプレハブ式を採用した。地面にはセメントを敷かず、セメントボードを敷いて、後日取り外せるようにした。

山岳地帯は資源が不足しており、建材はルンビニにある慈済の連絡所から運んできた。組み立て作業員も被災地で現地採用した。慈済の建築ボランティアの指導の下、彼らは素早く技術を習得した。「仕事を与えて支援に代える」活動に参加してもらうことで、工賃収入が得られ、被災した彼らも生活を維持することができた。

異郷で新年を迎えながら作業を急ぐ

二〇二三年十二月三日に工事が始まり、ボランティアは被災地で新年を迎え

た。一方ルンビニのチームも休むことなく、建築ボランティアはプレハブ教室のドアや窓、壁板など建材の準備に全力を尽くし、新年の初日に、トラックで被災地に運んでもらった。慈済は五つの学校で合計三十の教室を建設した。

教室の使用が始まると、ボランティアは教科書と教材を提供し、またルンビニにある慈済の職業訓練コースの学生が作った石鹸と毛糸の帽子をプレゼントした。マレーシアボランティアの張栢林（ツァン・バイリン）さんは、「ルンビニで『仕事を与えて支援に代える』活動を進めているボランティアに、感謝しなけ

ればなりません。組み立ての第一歩では、フレームを溶接してから被災地に運ぶ予定でしたが、山岳地帯の道路状況が悪いため、途中でトラックからトラクターに移して運ばなければならなかったのです」と言った。また、トラクターですら到達できない学校もあり、百人もの村民がリレー式に、建材を運んだ。

一月中旬、山間部の気温が摂氏零度前後になったが、クベイニ小中学校の九つのプレハブ教室は全て完成した。第一段階の建設支援が終了すると、続いて学校の宿舍用の四つのプレハブ住宅の建設が待っていた。（慈済月刊六八七期より）

## 仏陀成道の地に行く 書き尽くせない苦楽

文・魏玉縣（台中慈済ボランティア）  
写真・陳麗雪（台中慈済ボランティア）  
訳・施燕芬

台湾に戻ってから、ブツダガヤに滞在した三週間のことをよく思い出す。レポートを書いていた、シャワーを浴びている時に停電になると、  
平静さを保つよう訓練した。

毎日外出でトゥクトゥクに乗っていたので、腕の力が鍛えられた。

それから誰も行きたがらない村に行くのも、週に一度の楽しい時間だった。

# ブ

ツダガヤに来れば、どこよりも早く成仏できますよ」。二〇二三年

九月九日、私はマレーシアのボランティア十一人とブツダガヤ慈済連絡所に到着し、今年二月からブツダガヤに駐在し

ているマレーシア・セラングール支部の副執行長・蘇祈逢（スー・チーフオン）さんは、こう言った。

蘇さんが言いたいのは、これからそこで様々な試練が待っているという意味



だった。実はそこへ行く前私は、インドの暑さと食事に慣れなければならぬ心構えができていたつもりだったので、彼の言葉を真剣に受け止めなかった。

私と同じく台中市中区から来た陳麗雪（ツン・リーシュエ）さんは、撮影と日誌レポートを書く担当で、私は文字で記録する係りだった。彼女は早めに九月一日に出発し、私の宿泊先を用意してくれていた。またインドと台湾の時差は二時間半だけなので、その晩、荷物を置くと、

直ちに出かけた。私は医師のチトラ先生をインタビューした。

### チトラ先生の帰郷

数カ月の運用を経ると、慈済の各チームは、それぞれ担当する役割にかなり慣れた。そして、慈善、医療、教育などのチームは、翌日果たすべき任務をラインで伝え、随行できるボランティアはそこに申し込んでもらうことで、トゥクトゥク（三輪タクシー）を手配した。

私たち文書記録チームは、チトラ先生の医療チームについて行

くことにした。健康診断を行う過程をレポートする他、医師であるチトラ先生の人物像を描こうと考えた。

チトラ先生は一九六三年生まれで、インドのチェンナイ出身である。彼女は一九八八年に、マレーシアのコタキナバルから来たご主人と結婚した後、医師

●9月12日、チトラ先生はスジャータ村のコーニー路地で、3件の医療ケースを訪問した。その中の火傷を負った6歳の少年は、5本の指が既に変形して硬直していた。（撮影・葉晋宏）



としてコタキナバルに定住し、二年前に医師を退職した。彼女は隣人の誘いで慈済の活動によく参加するようになり、十五年前に慈済人医会のメンバーになり、花蓮で開催された世界人医会（TIMA）の総会に出席したこともある。

慈済がブツダガヤで深くボランティア活動を進めていることを知った彼女は、自ら参加したいと申し込んだ。現地の方言や風土人情に熟知している点で力になれるため、彼女は医療チームのボランティアと一緒に、貧しい村落で奉仕している。

ガンジス河岸のビハール村に着くと、ム担当でシンガポールから来た看護師の林金燕（リン・ヂンイェン）さんは、健康診断を受けたい世帯の家の入り口に番号札を掛けるよう、チームに要請した。初歩的な健診結果で治療が必要と認められた人は、地域の診療所に報告した。生活の困窮でBMI値が十六以下の体重が軽すぎる人には、ひよこ豆や大豆などの豆類を毎月無償で配付し、栄養を補給する。

チトラ先生は、誰に対しても常に笑顔で話をする。私は英語が不得意なので、彼女にインタビューした時、マレーシアのボランティアの通訳を介して行っただが、

空気中に漂う牛糞の匂いに襲われた。道を歩くと牛や羊たちとすれ違い、ヒヨコをつれたニワトリが餌を探している光景にも出会い、まるで四、五十年前の台湾の農村風景を見ているようだった。

チトラ先生は三十年以上もインドを離れていたが、流暢な方言で村人に挨拶し、家庭の状況を尋ねたりした。高血圧の持病を持つ村人に会おうと、飲酒をやめるよう丁寧にアドバイスをしたり、体調不良を訴えた女性の話に耳を傾けたりした。彼女は側に座って手を握ったりして、まるで家族のように寄り添っていた。

村の家には表札がないため、医療チームの先生はそれを気にする様子もなく、このような素晴らしい交流ができた。

### 大樹の下の青空人文教室

九月十一日午後三時半、私は教育チームと一緒にスジャータ村のコロニー街に来て、週に一回の「大樹の下の青空人文教室」が開かれた。

トゥクトゥクで尼連禅河の浅瀬を渡り、コロニー街に到着した時、はしゃいで遊びまわる子供たちと、家の前に座るか、赤ん坊を抱きながらトゥクトゥクが通り過ぎていくのをぼうっと見ている女





●週に一回の「大樹の下の青空人文教室」を開くため、教育チームはバクルルの市場を訪れ、地元ボランティアのロージーさんが子どもたちに物語を話して聞かせた。

性たちを見かけた。

「どこへ行けば見つかるのでしょうか？」そこに着いてから、私は教育チーム担当の姚雅美（ヤオ・ヤーマイ）さんに尋ねた。彼女は即座に、「一軒ずつ家を訪ねるのですよ」と言った。他の人も目が覚めたかのように家々の方へ向かっ

た。女性たちにヘアバンドの縫い方を教え、子供たちと楽しく遊ぶために、一軒一軒声をかけた。暫くして、大人と子供合わせて四、五十人がやって来た。

あのような光景を見て私は言葉を失った。授業というのは、子どもたちが自ら受けにやってくるのではないのか？私



は元教師だが、「恐れ知らず」の精神を持った教育チームに感心してしまった。

同じ「大樹の下で青空人文教室」でも、シロンガ村のバクルルバザールでは違った光景が見られた。

九月十五日の午後、バクルルバザールに到着する前、チームが初めて来た時、村の入り口にある木の下で授業を行おうと思っていたが、木陰が小さくて日差しを遮ることができず、とても暑かったので、涼しそうな村の奥の方へ行くことになったのだ、と姚さんが教えてくれた。

メンバーが子どもたちを誘った時、彼らの母親たちは、裏の村の住民は前の村

も秩序正しくレクリエーションに参加してくれる。

チームは、『證嚴法師が語る物語』の中の「少女を救った象」という話を用意した。陳麗婷（ツン・リーティン）師姐と現地ボランティアのロージー・パーウィンさんは、それぞれノートパソコンで同時にビデオを再生し、ロージーさんも映像に合わせて、方言でストーリーを説明した。

スクリーンは大きくなかったので、目を大きくして見つめた。彼らが理解できたかどうかはさておき、その集中した様子が不憫に思えてならなかった。彼ら

に比べて身分がもつと低いので、彼女たちの子供を裏の子どもたちと一緒に遊ばせたくないと言って拒否した。メンバーが表の村の小道を通って、裏の村に行く度に、子どもたちは羨ましそうに見ているしかなかった。

メンバーたちが村に入って来るのを見ると、裏の村の子どもたちは、直ぐ小さな両手で黒いあごを支え、「クシー！クシー！」（ヒンディー語で幸福、喜びを意味する）のポーズをとるのだ。そして、彼らは自主的に大樹の下に集まり、私たちに倣って右へ左へ動いたり、上に下に飛び跳ねたりして、一緒に合わせ、とて

の家はとても質素で、ベッドと簡単な炊事道具の他に余分な物はなく、テレビや携帯電話は言うに及ばない。

授業の途中で雨が降り出した。大人も子供も急いで雨宿りし、ある者は家に駆け戻り、ある者は近くの木の下にある空き家に逃げ込んだ。雨が止み、人々は建物から出てきたが、施依伶（スー・イーリン）師姐は滑って転んでしまった。泥だらけの地面は滑りやすく、三人のボランティアが次々に滑って転び、服もズボンも靴も泥まみれになってしまった。これらの光景を見ていた子どもたちは、無邪気に叫んだり、笑ったりしたので、

大人ももらい笑いをした。その大人も子供も楽しくなった光景は、白い靴が泥まみれになった苦境を忘れさせた。

村を出る頃に、施さんは私を呼び止めて言った。「この子は、私がまた転ぶとといけないので、先ほどからずっと私と手を繋いでいるのです」。私は振り向いて、スマホでその光景を写した。そして、私はロージーさんに、なぜ先生の手を引いているのかをその子に聞いてもらった。するとその子は、大波が来た時、ゾウさんが少女を救った映像を見て、先生を「救ってやりたいのです」と言ったのだ。その返事は皆の心を打った。正にそれは、「心、

仏、衆生の三つには区別がない」ことを最もよく表している証しではないか。

### 心はブツダガヤにある

トウクトウクという乗り物は、ブツダガヤでは最も便利な交通手段だ。この電動三輪車は、後部に二列の椅子が向かい合わせになっていて、四人が乗れ、前は運転席の隣にもう一人乗れる。現地は殆どセメント道だが、路面は穴だらけで、トウクトウクは上下左右に揺れるため、つり輪にしっかりと掴まらずにはいられない。

他の車とすれ違う時、危ないので、体を座席横の鉄柵から出さないように、と経験豊富なボランティアが注意してくれた。数日後、吊り輪に強く捕まっていたせいで肩が痛くなった。また座席横の鉄柵に当たったせいで、両上腕部もかすかな痛みを覚えた。

ボランティアは殆ど毎日外出しななければならなかったが、連絡所に戻っても仕事に没頭した。ケータイに「昼食の用意ができました」、「夕食ですよ」というメッセージが来ると、最上階に上がって、交代で担当するマレーシアのボランティアたちが作ってくれた昼食や夕食をいただ

いた。その日が何月の何日なのかは問題ではない。パソコンの作業中やシャワーの最中に停電になっても慌てることはない。直ぐに発電機が起動し、電気が送られて来るからだ。

九月二十八日は台湾に帰る日だったが、そこを離れる前にもう一度ラオ・シャンニーに会いたかった。ラオ・シャンニーと出会ったのは、ブツダガヤに到着して三日目の午後だった。私の孫娘と同じくらいの年頃だが、顔が傷ついて五官が大きく崩れ、右の手のひらも外側に向き、母親の手に引かれて、大勢の人について歩いていていた。側にいたボランティア



のシーマさんに事情を尋ねると、慈済ボランティアが既に手を差し伸べていると分かったので、ひと安心した。

一年半前、彼女は誤ってベッドから転落した際、丁度ベッド脇で暖を取っていた火のついた薪の上に落下したため、顔と右手に大火傷を負ってしまったとのこと。私たちはラオ・シャンニーの足の傷をチェックし、傷口から感染しないために定時に薬を塗るよう、母親に言付けた。ラオ・シャンニーが慈済人の支援の下に、平穩無事にこれからの人生を迎えられる

●お姉さんに抱かれたラオ・シャンニーは、慈済の医療補助により、第一段階の整形手術を終えた。

ように、と心の中で祈った。

台湾に戻って二日目、私は自宅の裏山の道を歩いていた。一カ月ぶりの山道で、眼下にある台中の街を眺めながら、「今日も慈善チームはスジャータ村の女性たちに手工芸を教えに行くかな、教育チームは学校で運動会を開くのかな、医療チームは……」と、さまざまな思いが頭をよぎった。

私は台湾にいるが、心はブツダガヤにある。（慈済月刊六八四期より）

●台湾ボランティアの魏玉縣さんは、チームと一緒に前正覚山を訪れた。山中の留影窟で仏陀に礼拝した後、仏陀が2500年余り前に、ここで悟りを開こうとした情景に思いを馳せた。



## 自分が菩薩になれることに期待する

菩薩になれる自分に期待して、人の為に道を敷きましよう

菩薩はもし、道を敷かなければ、ただの行きずりの人に過ぎません。

自分がしっかりこの道を歩むだけでなく、

後から来る人の為にも、平穩に歩める道を残さなければなりません。

これこそが私たちの生命の価値です。

### 寒

い冬が過ぎ去り、温暖な春がやってきて、大地に春が巡ってくる

ことで、万物は栄えるのです。私たちも同じく、仏に学ぶ心が新春にめぐり

逢うように、法を心の中に存分に吸収すれば、繁榮して力強くなれます。毎日が新年であるかのように、いつも互いに祝福し、感謝し合うのが、人と接

する最も美しい光景です。

旧正月前、台湾の数十カ所の慈濟道場で、「年越し」の食事が開かれ、心をこめてケア世帯を招待しました。慈濟が一九六九年に普明寺で初めて冬季配付を行って以来、毎年、年越しの食事会で、社会の暗がりや家にいて寂しく一人暮らしをしているお年寄りも、この場所に来れば、人々と顔を合わせることができるのです。慈濟は大家族なのですから。

世の衆生を自分の家族と見なす愛は、とても誠意のあるものです。私たちが毎日早朝に「大殿」（本殿）で〈炉香讚〉



を唱えているように、「心のこもった誠意があれば、諸仏は姿を現わす」のです。その実、諸仏や菩薩の姿が私たちには見えなくても、感じ取れることは出れます。なぜなら自分が誠実なのは、仏様がお分かりになっていると信じており、またこの誠意が証明されたからこそ、仏様が私の心の中にその姿を表すのです。誰もがこのような心を持つていれば、仏様や菩薩はいつでも私たちの心にあります。仏心や菩薩心があれば、自然とあらゆる衆生に対して誠意で接するようになります。

慈濟人は、この世の貧困や病、一人暮らしのお年寄り、障害者を見れば、

と音をたてながら、大きなかめに空けま  
す。これが竹筒歲月であり、軽々しく見  
てはいけません。一滴の水でも河となっ  
て乾いた大地を潤します。僅かでも集  
まれば、無数の救済ができるのです。

旧正月の間、多くの国々から慈濟人  
が私に会いに帰って来ます。静思精舎は  
世界中の慈濟人の家なのです。皆さん  
は普段は人間（じんかん）で精進して  
いますが、精進の道場と同時に仏法の  
大家庭に帰って来るのです。除夜の食  
事は二百卓以上になり、どのテーブ  
ルに行っても、喜びに溢れた挨拶の声  
が聞こえてきます。

慈濟人は毎日のように人と良縁を結

直ぐに関心を寄せて寄り添い、連絡が  
取れば情報は繋がり、良縁が結ばれま  
す。年越しや節句に家々で楽しく団欒  
する時、彼らは困難を乗り越えて来た  
ことを忘れていません。そこでボラン  
ティアは、年越しの美味しい料理を用  
意して「囲炉（食卓を囲む）」をしたり、  
各テーブルを回って話をしたり、料理  
を取ってあげたりすることで、彼らに美  
味しい料理を楽しみむだけでなく、心遣い  
も感じ取ってもらうのです。招待され  
た人たちは喜びに満ちたことでしょう。

「囲炉」の時、多くのケア世帯が「竹  
筒貯金箱」を持って来て、毎月コツコツ  
貯めた硬貨をチャラチャラ、カラカラ

ぶと共に、常に自分への祝福もしなけ  
ればいけません。「幸いにも私は慈濟の  
大家庭にいますので、師父は私を『菩薩』  
と呼んでくれます。菩薩にならなけれ  
ば……」と誰かが言いました。慈濟は  
間もなく六十年になります。世界中の  
慈濟人のサポートに感謝し、心と愛で  
道を切り開いては敷いて来ました。菩  
薩は道を切り開かなければ、ただの通  
りすがりの人でしかありません。私た  
ちの役目はその道をしっかりと歩むだけ  
でなく、後の人に軽快で平穩に歩ける  
大道を残すようにすることであり、こ  
れが生命の価値なのです。

世の中には欠陥のある人生を送って

いる人がとても多いのです。様々な人間（じんかん）の苦を目にしなければ、ぼんやりした日々を送ってしまいます。世の苦難の声に耳を傾ければ、自分の幸福を大切にしようになります。福があつて、因縁によって苦を目にしたのなら、使命感と責任感で以て愛の力を啓発すべきです。どこかの国で苦難や災難が起これば、その慈済人が行動を起こします。災害の面積が大きい時は他国から動員することもあります。或いは被災者の自力救済を促し、「仕事を以て支援に代える」方式で、自分たちの町や身寄りのないお年寄りをケア

だけを聞いていると時はすぐに過ぎ去ってしまいます。人生もまた、この一秒の間に飛び去り、自覚を持たなければ、知らない間に過ぎて行き、気にしていないと、命もまた時と共に飛び去ってしまいます。時はどんなに把握しても、極微細なミリ秒も過ぎて行きます。時を利用して、この一秒を価値のあるものに使うのです。

感慨深げに時は過ぎ去りますが、「命もまたそれと共に終わる」のです。そして、過去の歴史は積み上がりますが、それらの出来事があつたことに感謝し、この一生で実践してきた正しいことを

してもらうのです。災害支援は日常生活にも関心を寄せなければなりません。一時的な支援だけに留まらず、三カ月或いは半年掛けなければ、元の生活に戻れないと評価した場合は、中期的な支援をします。また家庭に独居のお年寄りや障害者、病人しかいなければ、長期ケアの対象にし、しいては人生の最後に至るまで関心を寄せなければなりません。ですから私は慈済人の大愛に感謝しています。菩薩のいる所には苦難の人々に幸福が訪れるのです。

一日は八万六千四百秒と聴くと、多いように思いますが、時計のチクタク忘れてはいけません。体力は歳を追って衰えていきますが、精進に努め、自分の気力と勇気を忘れずにいたいものです。なぜなら修行の目的は衆生を濟度することであり、それは縁がないとできません。この一生で、もっと多く福縁を結んでこそ、来世で修行する時、衆生との縁に恵まれるのです。修行が長ければ長い程、濟度出来る人が多くなります。人間（じんかん）の至る所は菩薩道に通じ、一本一本の菩薩道は仏道に通じるのです。どうぞ絶えず心して励んでください。

（慈済月刊六八八期より）



# 善い願を共に実行する お力添えに感謝する

◎ 訳・施燕芬

**敬** 愛なる慈濟ボランティアと会員、各業界の良き友人の皆様、こんにちは。謹んで新春のお祝いを申し上げます。昨年は皆様からの温かいご支援により、慈濟慈善志業が成長と感動で満たされたことを心より感謝申し上げます。

## 新しい取り組みが認められた

慈濟の栄光をすべて分かち合う——昨

年の「アジア太平洋サステナビリティ・アクション・アワード」において、慈濟の持続可能な開発目標達成に向けた取り組みが表彰されました。「慈濟とPaCaMOによる環境防災教育」、「エコ福祉用具」、「VO2 菜食弁当でCO2削減」の三つの活動が金賞を獲得し、環境保護教育と寄り添いケア、食生活関係で、創意工夫とその成果が認められました。

慈濟基金会は、「二〇二〇年〜二〇二一

年SDGsレポート」に、社会的、人文、寄り添いケアなど社会的協力への取り組みが示されています。また、コロナ禍の期間にワクチンの購入と寄贈で衆生を利したことで、SGS（検査認証の会社）の第八回「ESGアワード：ダイバーシティ&インクルージョン賞」で唯一の受賞者となりました。政府経済部の「購買力・社会イノベーション製品およびサービス推進」において、慈濟青年公益実践プロジェクトが青年の社会イノベーションを大きく後押しし、公益事業を促進したことが、再びBuying部門の最優秀賞に選ばれました。

昨年度、教育部（文部省に相当）青年署の「青年海外ボランティア活動優秀

チーム選抜」において、慈濟国際青年会TIIYAの「マンナハイの約束—シリア難民への中国語講座伴走プログラム」が、革新的な中国語講座プラットフォームをオンライン遠隔学習という形で、台湾とトルコ、シリアの学生らを結びつけたことを、初めてコンテストに応募したところ、「貢献成果と評価」の部門で特別優秀賞、そして「チームの創設と伝承」部門で優秀賞を獲得しました。

## 台湾を守りながら影響力を広げる

慈濟は台湾に根ざし、長年恵まれない家庭を支援して、青少年教育、高齢者の



安全な生活環境、防災教育に力を注ぎ、デジタル化した慈善システムによって強力なネットワークで台湾を守ってきた。地方自治体の各部門だけでなく、四十の民間企業とも契約を交わし、恵まれない家庭の子どもへの就学補助や心身障害者ケア、災害時の支援効率アップ、物資の輸送、防災教育などで協力することによって、公益における相乗効果を上げています。また、都市部と農村部合わせて一万六千軒以上の商店が既に「愛ある商店」計画に参加し、顧客が少額のお金を寄付して共に善行することを呼びかけています。

社会的投資収益率（SROI）に基づいて計算すると、各地の静思堂で台湾ドル一元を寄付した場合、8.5倍の慈善エネルギーが生まれ、環境保全志業へ投入した場合は6.3倍のポジティブな効果、エコ福祉用具活動の場合は81.18倍もの社会的影響力を生み出していることになり、支援を受ける側の経済的負担の軽減にも繋がっています。

二〇五〇年までのネット・ゼロ・エミッションを目指し、十七カ所の静思堂に太陽光パネルを取り付け、グリーンエネルギーの創出とスマートエネルギー貯蔵システム、エネルギーの正しい使い方向かって邁進しています。また、台北市松山区には植物性飲食の複合施設「植境」が

オープンしました。ここでは、若い世代に斬新な菜食を体験してもらうための活動が始まっています。その他にも、移動式環境保全教育車両を十五の県や市の小中学校に派遣したり、公的施設で九十回ほどの展示イベントを開催したりしており、既に延べ十万人以上が参加しました。

## ホタルの淡い光が世界で灯る

二〇二三年世界宗教議会の閉会式で、證嚴法師が要請に答えてオンラインで、世界が直面している問題についての懸念と感謝の気持ちを述べられました。

慈済は国連や世界のNGO組織と協力

二〇五〇年までのネット・ゼロ・エミッションを目指し、十七カ所の静思堂に太陽光パネルを取り付け、グリーンエネルギーの創出とスマートエネルギー貯蔵システム、エネルギーの正しい使い方向かって邁進しています。また、台北市松山区には植物性飲食の複合施設「植境」が

していますが、昨年の国際災害支援で援助した人数は延べ四十五万人以上を数え、台湾の米による支援で延べ七十九万人が恩恵を受け、戦争で避難した延べ五十八万人を支援しました。現地の長期的な教育支援と養成ボランティアの自立によって、蛍の淡い光が各地に広がるように、これこそグローバル・ローカリゼーション化した善の循環と言えるのではないのでしょうか。

ネパールのルンビニやカピラヴァストウ、インドのブダガヤなどで、慈善・医療・教育・人文という「四面体支援」によって、「仏陀の故郷に恩返し」プロジェクトを推進してきました。ネパール



で国際非政府組織（INGO）が設立されたことを機に、女性の職業訓練、貧困からの脱出、就学費の助成に焦点を当て、人々の生活を改善して人文教養を高めることに力を入れています。

九月には、米国ハーバード大学文理学部との共催で、「第九回グローバル共善学思会シンポジウム」が同大学で開催されました。世界各地から三十名以上の学者や専門家が参加して、「證嚴法師の思想と実践に関する研究」をテーマにした研究発表がありました。世界最高峰と言われる大学で、慈済の開祖證嚴法師の思想とリーダーシップによる行いが研究討論されたのです。

## 青年ボランティアが役割を引き継ぐ

昨年、台湾全土の延べ二十五万人が参加し、高雄、彰化、台北で上演回数二十三回に及んだ経蔵劇「無量義・法髓頌」は芸術と仏教を融合したもので、慈済志業が世の中で仏陀の教えを実践していることを表していると共に、自らの清らかな本性と法師に対する「必ずやり遂げます」という途切れない決意を表しています。千人近い若者が経蔵劇に参加して、一挙手一投足で仏法を表し、観衆と深く共鳴したことで、大きな希望を感じました。

青年たちの引き継ぎに、研修キャンプ

側は手応えを感じており、慈済国際青年協会（TIYA）が多国籍の人材を育成して、COP28やクライメート・ウィーク・ニューヨーク、国連経済社会理事會青年フォーラムなどの国際会議に出席していることもその表れです。

アメリカ海洋大気庁（NOAA）の研究統計によると、二〇二三年七月六日、世界の気温が再び高温記録を刷新したとのことです。国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が発表した報告書によれば、多くの科学者は、人類の行動が気候温暖化をもたらしていると考えています。

深刻化する気候非常事態宣言に向き合い、誰もが人類の持続可能という使命を共に背負っているのです。慈済基金会はガバナンスの強化、領域を超えたデジタル化、エンパワーメントの伝承、防災教育と菜食の促進、持続可能なネットゼロエミッションの実現に向けての取り組みを、皆様のご支援の下で着実に実践してまいります。

本年も、お力添えをよろしくお願い申し上げます。皆様にとつて良い年になりますよう祝福を祈念して、私からの挨拶とさせていただきます。（慈済月刊六八七期より）

仏教慈済慈善事業基金会執行長

張博文



# 呼吸ができる家

四十年間住んできたが、物は入っても出ることがないため、家には呼吸できる場所が無いほどになっていた。

ボランティアは陳さんに付き添って、「要る物」と「要らない物」を選び分けた。

## 築

四十年の古いアパートは、昔ながらの住宅街に位置し、二階にある広さ二十七坪の住居に三世帯の五人が生活している。バルコニーだけを見ても物

が一杯に置かれ、リビングのソファ、テーブル、スツールにも多くの物が積み重ねられていて、それらしく見えなかった。棚は薬が入った袋で一杯だ。そして、

巨大な魚の観賞用水槽が空のままリビングの中央に横たわっていた。

三つある部屋にはそれぞれ、陳さん、癌を患う次男、奥さんと長男の二人の娘が暮らしていた。物が床から天井まで積み上げられ、部屋いっぱいになっていて、横向きでないと移動できない。微かな光が窓から入ってきていたが、寝るスペース以外は全て物で埋め尽くされていて、この家には「呼吸」できる場所がないほどだ。

八年ほど前、ある小学校の先生から慈済に、二人の子供の面倒を見て欲しいと

いう依頼が来た。ボランティアの葉美雲（イエ・メイユン）さんは、その時から現在に至るまで、陳家に寄り添ってきた。陳さんの孫娘たちは、今はもう中学生である。葉さんは毎月自転車に乗って、台北市忠孝東路六段末から新北市汐止区南勢街まで三十分かけて通っている。雨の日も風の日も例外ではない。その誠意が通じたので、遠慮がちな陳さんは、やっと彼女に心の内を打ち明けるようになった。

「妻は人工透析をして寝たきりで、長男は刑務所を出て半年もしない内に家出して行方不明になりました。そして次男





●陳さん一家の了承を得て、ボランティアはリビングルームに置いてあった巨大な魚の観賞用水槽を、リサイクルするために運び出した。

が癌に罹ったのです。私は本気で運を変えなければ、と思っっています」。葉さんは陳さんがそう言ったのを聞いて、待ちに待った機会がやってきたと思った。「家を整理すれば、心も晴れますよ」。陳さんも承諾してくれた。

六月十八日、端午の節句の前日、十二人のボランティアが陳家にやって来た。

陳さんは「私はもう一週間も整理していません」とあわてて言った。皆で手分けして、バルコニー、リビング及び寝室を片付け始め、一つひとつ陳さんの同意を得てから物を捨てた。

空の水槽は捨てていいかと尋ねると、孫娘が「要る」と言い、陳さんは「要らない」と言ったので、膠着状態に陥った。葉

さんの説得で、孫娘がやっと捨てることに同意したので、リビングが広くなった。

今日は他にも大変な作業があった。奥さんが寝ているベッドを陳さんの寝室に搬入してから、電動ベッドを彼女の寝室に搬入したのだ。移動距離は長くないが、中間に動かせない食器棚と大きな冷蔵庫が道を塞いでおり、二部屋に長年貯まっていた物を捨ててスペースを作らなければならなかった。ボランテニアたちは力を振り絞って、やっとベッドを陳さんの寝室前まで運んだが、曲がり角のスペースが足りず、搬入することができなかった。

汗で濡れた服は乾く間もなかったが、ボランテニアは気落ちすることも、諦めることもなく、やっとベッドの方向を変え、寝室に押し込み、問題を解決することができた。陳さんが笑顔を見せた。長年マットレスだけで寝ていたが、今夜からやっとちゃんとしたベッドで寝られるようになるからだ。

ボランテニアたちは気を付けながら、水槽とマットレスを一階まで運び、普段は従業員に対して指揮している邱進興（チュウ・ジンシン）さんも一緒に一階まで運んだ。「陳さんにご近所です。今

日は上ったり下りたりして全身に汗をびっしょりかきましたが、人助けができて実に爽快です。自分で体験しないと分かりません」。エコ福祉用具を届けに来たボランテニアの曾立文（ジン・リウエン）さんは、「彼らの苦しみを和らげることができました。彼らの喜びは私たちの喜びでもあるのです。これこそまさしく、上人が私たちに求めていることです」と言った。

整理整頓は一段落しても、「寄り添いはつづけます」と葉さんが言った。陳さんはボランテニアと一緒に家の内外で忙し

くしていたが、「私一人の力では何もできませんでした。ボランテニアの皆さんには心から感謝しています」と言った。

数十年来、物は中に入れても、出すことはなかった。「捨てる」か「捨てない」か、陳さんにとっては決め難いことだった。それはまるで人生の方向を探している姿と同じである。ボランテニアたちは、力を合わせ、見返りを求めず奉仕しながら、陳さんが安心して生活できるように、また、人間（じんかん）の温かさを感じ取ってくれるようにと期待した。

（慈濟月刊六八一期より）



# 思いやりも練習が必要

## 問

子供が中学に進学しましたが、自分の事しか思い至らず、他人を思いやらないのです。私がきちんと教えていないからでしょうか？

答・友人のCさんの二人の娘さんは、

笑顔が素敵で、褒め上手で、誰からも好かれます。ご両親ともベテランボランティアなので、お母さんは図書館にボランティアに行く時、お子さんを連れ

て行き、一緒に本の整理をしています。

お子さんは自然に本に親しみを持つと共に、自主的に人に挨拶をしたり、小さい子供の世話をしたり、年長者に付き添ったりします。お父さんは毎日朝

早くからコミュニティで健康体操を教えてください。自分が健康になり、家族全員も早寝早起きの習慣を身につけるようになりました。

以下は、青春期的お子さんを持つご両親に読んでいただきたい内容です。

## 愛と手本

ほとんどの人は、子供を持つてから如何にして親になるかを学び始めます。いったい子供のためになるには、どのようなすれば良いのでしょうか。私は、

教育専門家が提唱している「愛と手本」を示すだけでいいと思います。

教師を退職した倪美英（ニー・メイイン）さんは、「愛」について独特な解釈をしています。

『愛』という字は真中に『心』があり、その上下の部分だけを合わせると『受』になります。つまり『心』の中に感じてこそ愛であり、『私があなただを叩いたり、叱ったりするのはあなたのためであり、今私たちがやっている全ては、あなたを愛しているからです』というのは間違っています。そういう愛情は

重すぎて、お子さんは愛を感じる事ができず、高い塀を築いて「自分」の空間に閉じこもってしまいます。

子供は、生まれると親の世話で成長しますから、「両親が手本となる」ことはとても重要です。お子さんが時間通りに起きて、寝て、食事する時はスマホをいじらないことを望むなら、親自身も時間通りに

寝て、ドラマ三昧になってはいけません。お子さんに読書を好きになつて欲しいければ、大人も本と一緒に読みな



しよう。両親が他人に関心を寄せていれば、お子さんは自然に周りの人思いやるようになるのです。

### 一緒にボランティアをする

作家の劉威麟（リュウ・ウェイリン）

さんは、「ボランティア活動に参加し、手本に出会う」という文章の中に、アメリカ・テキサス州立大学助教授のケビン・ランザ氏が発表した研究報告の引用がありました。ボランティアをする人は皆、或る特質があるとい



うのです。楽観的、積極的、ポジティブな考えを持つていると指摘しました。

ですから仲の良い友人の皆さんの家には、常に人も羨むほどの笑

い声が溢れているでしょう。

ボランティア活動はもう一つの学習あるいは社会と接触するルートであるだけではありません。このような活動は、今のところ主催者が事前に選別して手配しているの

で、お子さんにとってあまり刺激がなく、活動の内容もあまり挑戦的でなく、学べることは多くありません。しかし、奉仕に投入した時の最も貴重な体験は、同じようにボランティアをする人々に出会うことです。彼らの情熱的且つ積極的で前向きな生き方は、電子製品が築い



た高い塀を打ち破り、「オタク族」の冰山を溶かすことができます。

ですから、ご両親が休日に家から出て、お子さんを連れてボランティア活動に行ってみたらどうでしょう。お子さんは知らず知らずのうちに感化され、きつと情熱的で陽気な青年になるでしょう。真心で人に奉仕すれば、人生で小さな素晴らしいことと幸せを感じるでしょう。それが価値のある人生であり、その価値でお子さんがより奉仕する気になり、多くの人に接して、「手のひらを下に向ける」人になろうとするようになるでしょう。

## 両親が先に手を放す

手を放して、お子さんに自分で試して過ちを犯しても償い、解決させるのです。それは、肯定と信頼を意味していることであり、全ての過程を経験することでもっと強くなり、重責を担える力をつければ、将来、人生の責任を担うことができます。

手を放す過程で、心を落ち着かせてお子さんとよく、自分たちの期待について話合ってみましょう。ひたすら負担するのでは、期待が外れた時、傷付いてしまえば、そのまま親子が衝突してしまえば、

モラハラの一種になってしまいます。

かつて、お子さんに医学部への進学を望んだ、あるお父さんがいました。お子さんは要求通り医学部を勉強し終わりました。卒業式の日、お子さんは恭しく卒業証書をお父さんに捧げ、「私はもう『あなたの医学部』を勉強し終わりました。これからは、私の最も好きな数学科に進学します！」と言って、振り向きもせず出て行ってしまいました。後悔するお父さんが後に残されました。

人性は本来、自分を利するものであり、利他は後天的に培われた情操です。

しかし、絶えず練習する必要がある、ローマは一日にして成らず、ですから。お子さんが中学生の段階であれば、親子の間には感情の貯金があるはずで、どのように教えても、まだ間に合いません。ヘリコプターペアレントとなつて、過保護、過干渉或いは子供の生活に介入するより、むしろ子供を連れて、快適な生活から出て人に奉仕すべきです。そうして初めて、彼は「思いやり、観察する」ことを練習する機会に恵まれ、人との付き合い方が分かるようになり、利己的な人間になることはないでしょう。(慈済月刊六八五期より)

## まだ抱きしめることができる 両手がある

転んで両脚を骨折したお婆さんは、  
両手を鍛えて人と交流する方向に考えを切り替えた。  
竹を杖代わりにしていたお爺さんは私に、  
心がシンプルであれば、何事もシンプルになる、と教えてくれた。  
医療ボランティアの時の見聞から学んだのは、  
苦と楽は心の一念で作られているということだった。  
自分に希望とチャンスを与えれば、  
生命に思わぬサプライズがあるかもしれない。

## 慈

済に入って十数年になるが、最もよくボランティアするのが慈  
済病院の医療ボランティアである。今年、外来で奉仕した時、人  
の成長は年齢に限らず、経験によって智慧が成長するのだと分かった。

整形外科外来で、一人の九十五歳という高齢のお婆さんに出会った  
が、とても楽しそうだった。待合室で付き添いながら話をしていた間、  
彼女は絶えず両手を動かして運動していた。

「お婆さん、両脚はどうやって怪我したのですか」。

「近所の人が私にとっても良くしてくれて、いつも皆でおしゃべりし  
ていたのです。ある日、その人が玄関先で彼女の名前を呼んだので、  
私は急いで玄関を出たところ、転んでしまい、片方の脚を骨折しまし  
た。手術後、家で静養していましたが、回復した頃、お友だちが訪ね  
て来たので、急に嬉しくなって、挨拶しようとしてまた飛び出したら、も  
う一方の脚も骨折してしまっただけです」。

普通の人なら大変なことだと思うだろうが、お婆さんはそれを受け



入れた。仏法で言われるように、心が変われば全てが変わり、彼女は苦痛に遭遇すると、頭を切り替えた。彼女は、今は出掛けて近所の人たちと挨拶することができず、手を伸ばすしかなく、「申し訳ない」気持ちでいっぱいです、と言った。「だから、私は両手の運動をして、手を挙げるだけで、近所の人は、私だと分かるようにしているのです」。お婆さんはこういう方法で近所の人を抱きしめている。

別の診察室の外で、私は杖を突いて廊下を歩き回り、思い悩んだ顔をした男性に出会った。私は前に出て「何かお手伝いしましょうか？」と尋ねた。彼は必要ないと答えたが、続けて歩き回った。

また、或るお爺さんは一本の竹を持って杖にしていたのを見た。杖には白と赤のペンキが塗られ、赤い方は長く、白い方は短かったので、私の好奇心を掻き立てた。宗教信仰なのだろうか？それとも人目を引くためだろうか？そこで、声をかけた。お爺さんは、家に二種類のペンキが残っていて、赤いペンキが白いペンキより多かったので、

こんなふうに塗ったのだ、と答えた。お爺さんは、心が単純になれば、物事もシンプルになる、と教えてくれた。

先ほどのあの男性は傍でそれを聞いていて、私に手招きをした。「師姐、私は心が単純ではないのです」と言った。彼は十七年前トラックを運転して道端で金物を売っていたが、お金儲けのために、走り回って疲れてしまい、挙げ句の果てに交通事故を起こし、花蓮慈濟病院に運ばれて来て、呉文田（ウー・ウエンティエン）医師が手術をした、とのことだった。

今年初め、彼は骨に打ち込まれていた釘がずれて、痛みが起きたが、手術は五月まで待たないといけなかった。そんなに長く待ちたくないかったので、別の病院に向かった。その途中で、彼はずっと呉医師が親切で、医療に優れていることが忘れられず、また慈濟病院に戻って来てしまったが、待合室が人でいっぱいなのを見て、どうしたらいいか迷っていた。私は彼に、心が単純であれば物事がシンプルになると



(二〇二三年六月十六日ボランティア朝会から抜粋)  
(慈濟月刊六八三期より)

言っていたので、予約すればいい、と教えた。「生命はいつも私たちにサプライズをもたらしてくれ、自分に希望とチャンスを与えることです。もう一度医師に聞けば、転機が訪れるかもしれませんよ」。彼は私の話を聞いて、すぐその場で診察の予約をして、午前中の診察の最後の番号を取った。

昼食を終えて持ち場に戻ると、その人が丁度、診察室から出て来るのを見かけた。今日はとてもラッキーで、偶然ある患者が臨時に手術を取り消したので、来週月曜日に手術をしてくれることになった、と私に言った。何と良いニュースだろう！

苦と楽は心の一念で作られるものである。意気消沈した時は、あまり度が過ぎないようにすれば、人生では思わぬ回答が出て来るものだ。人生はとても短い。木の葉のように、新芽から緑の葉っぱになり、黄色になって、落ちてしまう。生と死の過程を把握し、考え方が正しければ、歩む道は正しいのだ。



# 私の執筆活動—— 「二本指タイピング」から始まったマジック

どんな仕事も、生まれつきできるわけではない。例えば、執筆活動。

私は「一本指タイピング」でパソコンを学び始め、楽しく活動をしている。

辛いと思うことはなく、美しい話を残すことで、幸せな気分になれる。

一九九五年に「一本指タイピング」

でパソコンを学び始めて原稿を

書き続け、今ではこのパソコンという

「ペン」と切っても切れない縁を結んだ。

誰でも何か本能を秘めている、と私は

信じている。例えば、私は慈済に参加し

てから、手話やシエフになる方法を学び、

訪問ケアボランティアとなって憂え悲

しんでいる人を奮い立たせ、生死の無常

に立ち向かわせた。また、人文記録ボ

ランティアになって、原稿書きや写真撮

影、動画編集などを学んだ。どれ一つ

とっても、生まれつきできるのではない。

学ぼうとする意思が必要であり、人生の

中で目標を立てて実践し、理想を実現す

るのである。

地域ボランティアの素晴らしい軌跡を

残すために、私はできないことをできる

まで学んだ。どんなことでも、その気さ

えあればできるようになる。「心して行

えば、プロになれる」のである。初めて

パソコンを買って、タイピングを習い始

めた時、私は宣伝チームのリーダーに

なったことを覚えている。初めてサマー

キャンプのマニュアルを作成した時は、

一つの原稿を編集するだけで、九回も電

子ファイルが消え、やり直さなければな

らなかつた。苦勞してタイプした原稿

ファイルが突如として消えてしまった

時、私は平常心を保って、「もう一度作

れば、もっと上手く書けるだろう」と自

分を励ますことしかできなかった。

何かを望めば苦しむことになる。證嚴

法師は、「見返りを求めず奉仕し、その上、

お札を言うのです」と論している。楽し

く物事を行えば、辛いと感じることはな

い。幸せとは、学ぼうとする意志から生まれ、「その気さえあれば、難しいことはない」のだ。

### 美しい心の旅を見届ける

インタビューを記録するために、ボランティアたちの人生を深く理解していくことは、あたかも何冊もの経典を讀んでいるようなものである。彼らのあらゆる奉仕に対して感動を覚えるようになった。ボランティアは皆、慈濟

で情熱をもって奉仕するという深い情に溢れているが、時には、衆生への思いやりの気持ちや与えることで得られる無上の喜びを、どのように表現したらよいのか分からなくなることがある。彼らの心に触れるたびに、私たちは永遠の初心を共有しているので、それによって慈濟の道を修行し続けることができることに気づく。

あるボランティアは以前、醜い自分がいるのは母親のせいだと恨み、カメラを見ると隠れてしまっていた。「こんなに



●林秀女（右から二人目）は2009年、清水の静思堂で歳末祝福会に参加しに来た夫婦をインタビューした。車椅子に座ったご主人が、「ここにいる人は皆とても優しく、私は温かさと感動で満たされました」と言った。



醜い私を撮らないください！」私は唾然として、「世の中に誰一人として娘を醜いと思う母親はいません。お母さんがその言葉を聞いたら、とても悲しむでしょう」と彼女に言った。そして、「心が美しければ、何を見ても美しいと思う」という法師のお諭しを、彼女と分かち合った。

次に会った時、彼女はユーモラスにこう言った。「写真を撮ってもらえますか？以前、私の心は美しくないことで劣等感を抱いていて、母を責めていたのです。姉姐（スージエ）が分かち合ってくれたおかげで、私は変われるのだと分かりました」。私は彼女の心の変化を記録し、

それを見届けることができたことに感謝すると共に、荘嚴な菩薩の姿を写真に撮らせてもらった。

人文記録ボランティアは、誰よりも「幸せ」である。イベント会場で取材をして、感動的な場面を撮影するだけでなく、イベントが終わると、自宅で編集する。そして、その美しい映像を、大愛テレビ局が世界中に広めてくれるのだ。

私の記事は、『慈済速報』や『慈済』月刊誌、『慈済道侶』シリーズの本に掲載されたことがある。動画撮影や編集を学び、大愛テレビでも何度か放送された。作品が採用されるたびに、認められたこ

とを感じた。しかし、自分でもそのコンテンツに感動しなければ、どうやって他人に感動を与えることができるだろうか？これらは私のこれまでの努力を肯定するものだと信じている。慈済を愛しているから、これからも努力を続ける。

人文記録ボランティアの使命は、「時代の証人となり、人類のために歴史を残し、慈済のために経典を書くこと」である。かつて法師は、「文字にして記録するのは頭を使うため、どちらかという大変な仕事ですが、それは永遠に残すことができ、何千年、何万年も保存されるのです」と言ったことがある。

世の中には美しい善意に満ちた話が沢山ある。どれも後世の教育で良薬となることができる。私は、あらゆる慈済人が、人文記録ボランティアになってくれることを望んでいる。全てが感動的な史実であり、私たちが心して記録するから残るのだ。そして、後に続く人たちはそのような菩薩の足跡と模範を追従するようになる。慈済の四大志業を全て歴史に残すために、人文記録ボランティアは必要だ。それはとても光栄なことであり、この因縁を大切にして、真の伝法菩薩となって、真実の仏法を世の中に伝えたい。

（慈済月刊六八一期より）

# 読書によって 慈済の種子を届けたい

主人は毎週末、私を連れて車でコミュニティを巡り、街角の小さい図書館（図書ボックス）を見つけては、慈済の書籍を置いていく。それから、ルートを見つけて、図書館や古本屋にも寄贈している。

私たちが住んでいる町には、中華系の人は多くなく、ボランティアの人数も数えるほどだ。

しかし、「努力した分だけ、得るものがある」。  
ひたすら努力するまでだ！

ウイニペグ市は、カナダ中央のマニトバ州にある。気候はかなり極端で、年平均の最高気温と最低温度の差が三十五℃にもなり、夏は暑くて短く、冬は寒くて長いという、カナダで一番寒い都市である。

カナダは移民の人種が多く、信仰も相応に多元的だ。ウイニペグ市の華人は大都市ほど多くはないが、人口の流動がかなり高いため、ボランティアを募集することが一層難しい。その上、過去三年間のコロナ禍の影響で、地域ボランティアはほぼ引き継がれていない。

慈済ウイニペグ連絡所は二〇〇八年

に設立され、マレーシアから来た蘇琪龍（スー・チーロン）さんが一人で、慈済のあらゆる事を担ってきた。四年後、蘇さんはケベック州のモントリオール市に引っ越し、その後、中国からきた李晟旭（リー・チェンシュエー）さんと劉玲璋（リユウ・リンウエイ）さん夫婦が引き継いだ。今年五月、李さん一家がアルバータ州のカルガリー市に引っ越したので、六月に、ウイニペグに来て一年の台湾人ボランティア黄添華（ホワン・テイエンホワ）さんが事務の窓口を受け持つようになった。

黄さんの家にある慈済に関する物のう





●今年6月、カナダのウィニペグ・フードバンクと合意し、候宣如さん（左から2人目）とボランティアたちは慈済の書籍を寄付して法縁者と縁を結んだ。

ち、二十箱余りに入っている約千六百冊の出版物は、私を取り扱った。どのようにして人と縁を結べばいいかを考えていると、姉の口ぐせである「考え方を変えて、祝福しよう」という言葉を思い出した。

確かに、これら素晴らしい書籍を人と分かち合える自分を祝福したいと思った。そして、週末になると必ず、主人が私を連れて車でコミュニティを巡り、街角に約

三十冊の本しか收容できないような小さい「図書館」を探し求めるようになった。他の人が本を置くのに影響しないように、私は慈済の書籍を毎回五冊だけ置くことにした。英語の本が大半を占める中で、中国語や日本語版の慈済の書籍が偶に出現すると目立つものだ。それから、当地の図書館と古本屋への寄贈も試みた。住民に少しでも慈済の事を知ってもらうチャンスを与えようと思ったのだ。

六月十日、蘇さんは、李さんと黄さんを招いて、オンラインで私に会わせてくれた。私たちはそれぞれ三つの異なる町に住んでいるが、互いに過去の事を分かち合い、慈濟の将来の色々な話を話し合った。

蘇さんは、二〇〇九年にウイニペグのボランティアとして、初めて歳末祝福会を催したことを振り返った。当時はそれに適した場所がなく、ボランティアも足りなく、ハード設備やソフトウェアも不足していたが、幸い、台湾から嫁いできた黄美華（ホワン・メイホワ）さんが、自分の家を臨時の会場にと提供してくれ

た。その後、林麗芬（リン・リーフェン）さんが、長期的に彼女の幼稚園を提供してくれたお陰で、年二回の比較的大規模な活動である、歳末祝福会と灌仏会を行うことができた。

蘇さんが話題を変えて、黄さんに尋ねた。「次はあなたが引き継ぐ番ですが、何か考えはありますか」。

「私は喜んで引き受けますが、宣如師姐と協力してやり遂げます。宣如師姐、聞こえましたか？」と黄さんは突然、私を指名した。

「引き受ける」という言葉は重苦しい。楽しいボランティアになりたいだけで、

言い訳を探して辞退したかったが、證嚴法師の言葉を思い出した。「異国の空の下で異国の地に生きるのですから、恩返しすることを忘れてはいけません」。すると、答えは自ずと「YES」に変わった。

「しょう！」と黄さんはいつも励ましてくれる。

十四年間、ウイニペグのボランティアは一人ひとり、と引き継がれて来たが、「実践しながら学び、学ぼうちに体得し、

ウイニペグのボランティアは目の前に広がる福田を歩いていくうちに、行き交う法縁者に出会う。たとえ偶然の出会いでも、或いは、何百、何千マイル離れていても、いつかは静思法脈の中で悦びに溢れた出会いがあるだろう。集まっては

体得を経て悟る」ことが精神的な支えとなっている。今でもボランティアの数は少なく、人間（じんかん）菩薩を大募集するのは更に遠い先のことだが、「構いません、全力を尽くした分だけ、得るものがあり、頑張って福田を耕していきま

去って行ったボランティアはタンポポのように、法師の教えを携え、「仏心師志」と言う四文字の下に、風に乗って各地に届けられ、もう一度「慈善」の種子として根付き、辛抱強く芽が出るきっかけを待っている。（慈濟月刊六八二期より）





## 実践したことを話す

◎文・釋徳侃／訳・済蓮

確かに歩んで来てこそ、

沿道の風景を心に刻むことができ、

実践することで、道理を話すことができるのです。

客が布施すると、オーナーが賞賛した

桃園の経蔵劇チームと愛ある商店チームの感想を聞いて、上人は、愛は無形でも、諸々の行動で誰かに何かを感じさせ、より多くの人が奉仕するよう導くことができ、もっと多くの愛を結集すれば、苦難を救う力はもっと大きくなり、支援する範囲も広くなり、救われる人ももっと多くなるのです、と言いました。

「慈済に参加するだけではなく、世の中の事を知らなければなりません。世の出来事を知れば、なぜ慈済が志業をするのかが分かってきます。衆生はこの世界を共有していますが、衆生というのは人間だけではなく、あらゆる生命を意味します。仏陀は菩薩の道、即ち私たちに衆生を愛護することを教えてくれました。人間（じんかん）ではないつも善と悪が綱引きをしていますから、仏陀は、善を助け、悪を断ち、人間（じんかん）の苦を断ち切るよう衆生に説法し、教えています。天国と地獄は、実は人間（じんかん）にあるのであって、善行すれば日々が楽しく、毎日天国にいるのです。もし悪念につられて悪事をすれば、日々地獄の苦しみを味わいます。これは明らかな道理です」。

上人のお考えでは、仏に学ぶ者は法でもって自ら悟りを開くと共に、他人を悟りに導いて、仏法を人間（じんかん）に根付かせなければならず、そして、道理を理解するだけでなく、もっと多くの人に理解してもらうことが大切なのです。ですから菩薩である皆さんが大衆を愛で満たし、方向を見失った人や一念の偏りで道を誤った人を導かなければなりません。皆さんが商店を訪ねて回り、お店が喜んで募金箱を



置くようになった商店街は、愛で満ちています。その募金箱には人助けに使ってほしいという愛のこもったお金が入っているのです。お店ごとに福を造り、喜んで布施するお客さんがいれば、店の主人は賞賛と感謝の言葉を述べるので、人間（じんかん）は温かく満たされていきます。

「私たちが募金する場合、どれだけ集めなければならぬかが目的なのではなく、一人ひとりが愛の心を啓発してくれることを願っているのです。心して愛を募る時、人に出会えば、自然と慈済のことを話すよう

桃園の慈済人は2022年から「愛ある商店」活動を始めた。活動メンバーは、復刻拡大した50銭銅貨で「竹筒歲月」を象徴して店の人に贈呈したことを説明した。（12月23日）

になります。会う人ごとに慈済のことを話すのは、人に会うごとに念仏するのと同じです。慈済が実践してきたことを話すのですから、どこその国や地域でどんな災害が発生したかを伝え、皆で慈済と一緒に支援し、善行することを勧めるのです。上人は、大愛テレビを見れば、最新の世界中で慈済の行いを知ることができるので、いつでもそれらを分かち合いながら、一緒に善行してほしいと声を掛けられたい、と言いました。

仏法は広大無辺であり、道理の範囲も無辺際ですが、やり遂げなければ語ることはできない、と上人は言います。「経は即ち道理であり、道理は道なのです」。もし学んだ道理を実践していなければ、目の前に道があっても、そこを歩かなければ、沿道の風景が分ならず、感想を話すことができないのと同じです。確実に歩んで来たのであれば、実際に体験したことを人に話すことができるのです。

上人はこんな話をしました。「以前、陳燦暉教授が聖嚴法師（台湾の宗教団体「法鼓山」の創始者）に会った時、『慈済は大衆の愛を結集



してこんなにも多くの善いことをしていますが、證嚴法師の体は弱く、万が一の時に、慈濟はどうすればいいのでしょうか?』と尋ねました。聖嚴法師は、『證嚴法師の思想や理念を五十人が持っていていれば、その五十人が即ち一体の證嚴法師なのです』とお答えになったそうです。

「私は聖嚴法師のその言葉にとっても感謝しています。人には誰でも仏心があり、私たちの本性は皆同じで、清らかな大愛を持っているのですから、誰もが『證嚴法師』であることを願っています。よく慈濟人が『それは師父の心願であり、師父の言う通りに私は実行します』と言うのを耳にします。私が皆さんに言いたいのは、これは釈迦牟尼仏が私たちにそう教えているのであり、私たちは縁がある故に、私が創設した慈濟で、皆が集まって一緒に人々を悟りに導いているのです。ですから、慈濟人が至る所に出向くのは、災害が多い今世で、一人ひとりの愛の支援を必要としていることを人々に知ってもらうためです。人助けができる人は幸せです。福を知って、福を惜しみ、更に福

を造るのです」。

上人はこう開示しました。経験豊富な慈濟人は三、四十年前から、一軒一軒家を訪ねて「托鉢募金」を行ってきましたが、今は街を歩いて「愛ある商店」を募っています。どちらも同じ精神であり、共に善行しようとする多くの人に呼びかけているのです。もし人数が少なければ、どんなに力があっても、広い範囲で全てを成しとげることはできません。

また、愛の募金箱を置かせてくれる店では、お客さんに愛の奉仕をする機会を与えています。それが一元であれ、五元、十元であれ、小さな額でも人々に幸福をもたらします。皆で愛の力を結集すれば、「福の氣」ができ、一人ひとりが福を造ってこそ、衆生の共業から出る「汚れた氣」を浄化できるのです。皆で親しい人や会員に愛を呼びかけてください。一人でも多くの人が応えてくれれば、それだけ人間(じんかん)に多く「福の氣」をもたらすことができます。善の念という清流と「福の氣」を、人間(じんかん)で絶えず高めることが大切です。

(慈濟月刊六八七期より)

## 三月の出来事



訳・済運

03・01

慈済基金会と慈済大学は、宗教団体のシカゴ・ヴィヴェカーナンダ・ヴェーダーンタ協会と共同で、即日より12月31日まで、オンラインで英語による仏教講座を開く。日本の京都大学と東北大学、台湾法鼓文理学院及びアメリカ・ハーバード大学、ナロパ大学、ニューヨークのユニオン神学校などから教授や学者を講師に迎える。講座の内容は仏教の起源と核心概念、初期の仏教の発展、仏教後期の発展と仏教現代主義、当代社会の仏教、世界変革者としての仏教などである。

03・02

◎慈済基金会は中正静思堂で正式に、第二期「マンナハイの約束」と題したシリア難民への中国語学習伴走プロジェクトと第一期「異郷の愛」と題したタイ北部での中国語学習伴走プロジェクトを開始した。国立師範大学教育学院の中国語教育学科のカリキュラムに基づくコースに、本日は75人が出席した。

◎静思書軒は拓凱教育基金会と共同で、初めて台中の慈済東大静思堂において、「二十一世紀の教養観——如何にして多元的に変化する世界と歩調を合わせるか」というテーマの下に講座を開いた。国立中央大学認知神経研究所の洪蘭（ホン・ラン）教授が招かれて、子供に教養を身につけさせる考えと方法について話した。360人が参加した。

03・03

◎北部慈済人医会は、2004年から台北市政府労働局と協力して、外国籍労働者の健康ケア活動を行っており、これまで延べ1万6千人



03・11	03・10	
<p>◎慈済基金会とエアリンク（航空輸送と物流のNGO）が共同で主催する「第二回アジア太平洋地区非営利団体のための人道支援物流防災ワークショップ」が11日から15日まで新店静思堂と花蓮静</p>	<p>◎国際仏教連盟（IBC）主席のラマ・アワング・テンジン・ギャソ氏と災害支援所秘書のナワン氏一行が、本日慈済インド・ブツダガヤ連絡所を訪れ、仏国プロジェクトチームの蘇祈逢（スウ・チーフオン）師兄と医療チームボランティアの林金燕（リン・ジンイェン）師姐が出迎え、慈済の由来及び当地で進めている慈善や医療などの志業活動の足跡を紹介した。</p> <p>◎慈済ドミニカ連絡所は設立25周年の記念行事を行い、120人余りが参加した。</p>	<p>慈済に提供している。</p>

03・07	
<p>「クラウド貯蔵システム」は新竹物流会社が開発したもので、無償で</p>	<p>慈済基金会は桃園八德静思堂で、「慈済緊急災害支援物資貯蔵管理教育講座」を開いた。劉效成（リュウ・シアオツン）副執行長を先頭に、総務所と慈発所及び防災関連業務の職員60数人が参加した。この</p> <p>が恩恵を受けた。本日、台北駅で本年度第一回の活動を催し、歯科、耳鼻咽喉科、内科、産婦人科、心身医学科、中医学科などの診療と共に、腹部と産婦人科のエコー検査が行われた。</p> <p>◎チリ慈済連絡所は、華僑懇親会の友誼会館で新春祈福感謝会を催し、参加者100人余りが訪れた。責任者の呉惠蘭（ウー・フウエイラン）師姐が、大衆の慈済に対する護持を感謝すると共に、慈済のビニャ・デル・マール火災被災者支援を呼びかけ、711万ペソの募金を集めた。</p>

03・15	03・14	
<p>ベトナムの人たちである。</p> <p>慈済基金会2024年外国語チーム・ルーツ探訪研修会が、15日から17日まで花蓮静思堂と静思精舎で開かれ、75人が参加した。そのうちの10人は外国籍で、ロシア、日本、インド、インドネシア、</p>	<p>は2024年3月14日から5月17日まで開かれる。</p> <p>デング熱や流感、新型コロナなどの病気と予防法を紹介した。展示会は2024年3月14日から5月17日まで開かれる。</p> <p>催され、マルチメディアを通じた体験とレベルクリアゲームによって、</p> <p>館と共同で、マラッカ静思堂にて「防疫戦キャンプ」の巡回展示会が</p> <p>慈済マレーシア・マラッカ支部は国家衛生研究院、国立科学工藝博物</p>	<p>他の5世帯が新たに参加して米貯金箱を受け取り、活動を盛り上げた。</p> <p>で20世帯の住民が呼応して、合計63キロの米を寄付した。当日、</p> <p>市第11区のサドハワ村で、「米貯金箱の里帰り」活動を行った。当村</p>

03・13	03・12	
<p>慈済基金会仏の国プロジェクトチームは、ネパール・ルンビニ文化都</p>	<p>から第47期が始まり、11月下旬まで23回開かれる。</p> <p>した。慈済が受け持つ本年度の新北市防災士養成講座は、3月6日から第47期が始まり、11月下旬まで23回開かれる。</p> <p>（ゾウ・ティーズ）氏と慈済副執行長の濟舵（チー・ドウオ）師兄が開講式を主宰</p> <p>13日に板橋静思堂で開かれた。新北市副市長の朱惕之（ヅウ・ティーズ）氏と慈済副執行長の濟舵（チー・ドウオ）師兄が開講式を主宰</p> <p>共催の「新北市2024年第49期防災士養成講座」が、12日と</p> <p>新北市政府消防局主催で、慈済基金会と台湾大学気候災害研究センター</p>	<p>思精舎で開かれた。</p> <p>◎第68回国連女性の地位委員会（CSW68）が11日から22日までアメリカ・ニューヨークで開かれた。慈済基金会の代表チームは全日程に出席すると共に、多数のインタラクティブ・ダイアログを主催した。</p>

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## 香港

TEL: 852-28937166  
フィリピン Manila  
TEL: 63-2-7320001  
タイ Bangkok  
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター  
970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路2段248号  
TEL: 886-5-5372000

慈済大学  
970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)  
231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター  
112 台北市立德路 8 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989000

静思人文  
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver  
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali  
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo  
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo  
TEL: 55-11-55394091

イギリス London  
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris  
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg  
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam  
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg  
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna  
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng  
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州  
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh  
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon  
TEL: 95-1-541494

マレーシア  
セラランゴール支部 KL  
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang  
TEL: 604-2281013

シンガポール  
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta  
TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局  
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota  
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman  
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul  
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney  
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド  
Auckland  
TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2024年4月19日発行・328号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)





## 本格的な学生カバン

摂氏20度が涼しく感じられる中、薄い半袖のワンピースを着ている子もいれば、裸足の子もいたが、キャンパスはとても賑やかだった。というのも、今日初めて新しい学生カバンを手にしたからだ。慈済ボランティアは2023年11月下旬から、インド・ブッダガヤの山奥にあるファテール・シークリーとタンクッパという場所で、13の小中学校合計4000人余りの生徒に学生カバンを贈呈した。子供たちの家庭は貧しく、学校に行く時はいつも手で教科書を持つか、ビニール袋に入れて手に下げて行くしかなかったのだ。みんなカバンをもらうと、片時も手離せないほど嬉しそうな顔をした。「もう教科書をなくすことはありません！」。(文・丁碧輝 撮影・林家如  
インド・タンクッパ区 2023年12月9日)



慈済日本サイト



慈済ものがたり